TOKYO

アークヒルズと幼稚園

編集部

二十一世紀の全環境都市アークヒルズ。音響の良さ、カラヤンを招聘しようとしたこけら落としコンサートでマスコミをにぎわしたサントリーホール、またその家賃の高さで有名になった森ビル、アークタワー及び全日空ホテルなどの総称である。いろいろ話題をふりまいたが、アークヒルズは六本木、赤坂地区の都市再開発計画であり、二十一世紀の都市モデルである。その外観は二十一世紀モデルにふさわしく、超近代的。

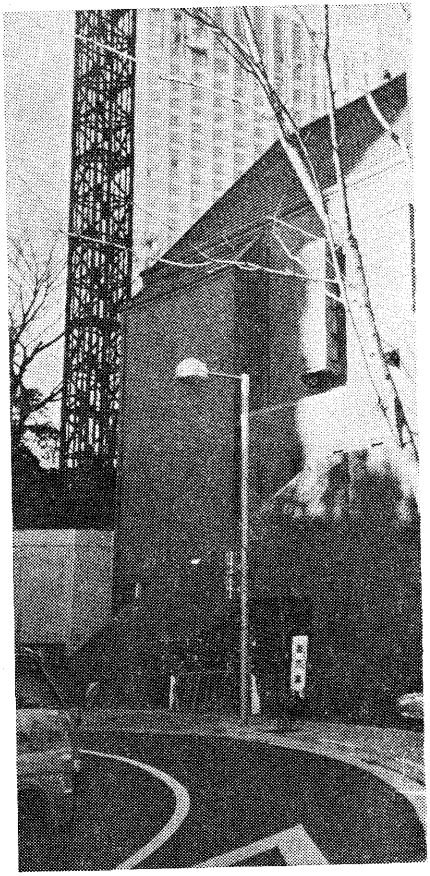
このアークヒルズの隣りに幼稚園がある。結婚式で有名な霊南坂教会の付属幼稚園がそれである。アークヒルズの建設に伴い、霊南坂教会もとんがり屋根のレンガ造りの建物からコンパクトなモダンなビルにかわった。超モダンビル群と幼稚園はどのように共存していっているのか。先月号の「仮り園舎から新園舎への引越」でご執筆頂いた赤羽先生に再びご登場願い、幼稚園と地域との関わりを中心にお話をお聞きした。

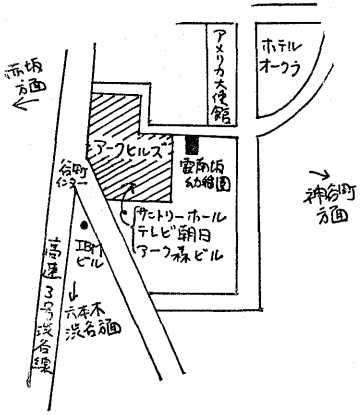
――まず、仮園舎に移ったいきさつからお聞きしたいのですが……

赤羽：森ビルの再開発計画が出たのは、それこそ十年以上前ですね。この区域で教会が一番公共のもので、あとは民家ばかりだったんです。それで、地域の皆さんがここにお集まりになって、いろいろ協議なさいました。

教会は一応賛成にたちました。教会の建物はレンガ造りの由緒ある建物でしたけれども、なにしろ古いものですから、白アリの被害やら何やらで大変だったんです。で、そろそろ建て直そうか、という時でしたので、一応賛成、ということになりました。

――教会自体を（永久に）他の場所に移転して下さい、というお話はなかったんでしょうか？





赤羽：賛成するからにはと、教会はあらゆる条件を出しました。ですから、あまり場所も変わらないで、ただ丘を削るぐらいですみました。

その工事に約二年かかりましたので、その間先月号に書きましたように、自然の多いお屋敷跡に移転していたんです。

――新しい幼稚園は前の幼稚園とは、大分違うもののようですが……

赤羽：ええ。昔は丘の上に立っていましたけれど、今度は、教会の地下室ですから。裏から見たら一階ですけれど、表から見たら地下なんです。運動場も地下にあるということになりますけど、まあ、こういう場所ですからね、あるだけでも良しとしなければ、と思っています。

――でも、地下だと日当りも悪いし、保育にさしつかえませんか？

赤羽：でも天気の良い日は必ずアークヒルズに遊びにいきますし、そこでお日様不足は補っています。

それに、回りはコンクリートだらけですが、隣りが唯

一残った民家なんです。だからそこの緑がおがめます、このあたりではまだ恵まれていると思います。

――本当に大都会の中の幼稚園、という感じですが、園児の方はこの近くの方が多いんですか？

赤羽：それはほとんどいませんね。今アークヒルズから一人、来年は二人来ることになっていますが、でも、歩いて来れる距離のところに住んでいる園児はほとんどおりません。

こういう場所でしょ。回りに人家はほとんど無いんですよ。ですから、お子さんはいらっしゃらない。

それでも港区が一番多いんです。今園児は全部で三十四人ですが、そのうち半分以上いますね。あとは二十三区から来ています。昨年は十七人卒業しまして、十七校の小学校へ行きました。むかしは横浜の方からも来ていました。ですから、そういう意味では地域に根ざした幼稚園、というのではないんです。

――先生はその三十四人を連れて移転なさったんですね。

赤羽：ええ、でも移転の時にちょっと問題がおこりました。いよいよ再開発が始まって、教会も移転する、という時に、教会も再開発だ、ということで新しい教会の在り方を模索しました。もともと幼稚園を建てたのは、区域の人達に伝道する、という使命を帯びたものだったのです。ところが、ほとんど区域の人は来ていない、というような状況になってしまっていましたので、もう幼稚園の使命は終わった、存続する意味がない。廃園にしたらどうか、という声が出ました。

――廃園、という意見まで出たんですか？

赤羽：そうなんです。九十九％廃園に決まっていました。でも、お預かりしている園児のご父兄には、存続してほしい、というご希望が多く、反対のために動いて下さったんです。ご父兄は「先生は保育にがんばって下さい。あとは私達がやりますから」とおっしゃって下さって、それは見事に結束なさいました。幼稚園のパワーがひとつになって動いて、廃園決定をひっくりかえしてしまったのです。

たしかに、六〇年以上前に幼稚園を建てた時の使命は終わったかもしれないが、今はまた別の使命がある。そういったことをお母様たちが述べ伝えながら、署名をなさったり、いろいろな方に訴えられたりしました。それで、結局廃園を決定するはずだった教会の総会で、理事の方は全員「存続」で手をあげられました。そうしてやっと存続が決まったんです。

でも存続に決まっても児童がいなくなれば、また必然的に廃園ですよね。存続が決まったのが神様の御こころであるならば、子どもは与えられるであろう、と信ずるよりほかないんです。でも、私達も保育、子どもの命というものをもっともっと考えなければならない。光を子どもに当てて、子どもも愛に溢れているならば、子どもからも光がでていくわけですから、そういう集団になりたいな、と思っています。

――そういう集団がこのアークヒルズのかたすみに生きる意義、というのは……

赤羽：私もね、この町がすっかり出来あがってしまうと、予想はしていたものの、回りはすべてまっ白でしょう。ここから出るのがイヤになっちゃうくらいなんです。ここに子ども集団を神様が与えて下さったのは、どういうことなのかしら、と時々思ってましたの。でもまあ、そんなことは急いで考えることではない、それよりは与えられたものを私達が大事にしなければ、と思っていました。

そうしましたら、変なことに気づきました。お昼頃でも来てごらんになると、おわかりになると思うんですけど、アークヒルズの中のお昼時には、あの白いビルから出ていらした方が、疲れはてたようにベンチに座ってらっしゃる。皆さん生気がないの。その回りの空気が動かない、っていう感じなんですよ。

そこで、私は、そういう方の前では子どもたちとスクーターにのったり、追いかけっこしたりしているのが悪いような気分になってきちゃうの。「ごめんなさい、今幼稚園に帰りますから」なんて申しあげると、「いえ、良いんですよ」って皆さんがおっしゃって、子どもに話

しかけてくれる。子どもがころんだだけで、よく笑ってくれるし、今日初めて「人」と話したように、子どもと語りあってくれるんです。最初は悪いな、なんて思っていたんですけど、最近は子どもが来るのを楽しみにしてくれるようになりました。

それで、私はこの空間に子供がいる、というのは意義のあることである。子供とは、疲れはてた大人を潤してくれるような存在であるって気づいたんです。

そのためには、子供に元気がなければしょうがない。横はビル、ビルで八方ふさがりだけれど、天井はあいている。そこをかけめぐるような、子供の本来の姿をお見せしなければ、と思っているんです。

――先月号にお書きいただきましたけれど、ガリラヤ園のような幼稚園ですね。

赤羽：そうです。風がある日なんか、風船もって出掛けると、アークのビル風で風船どころか、子どもが飛ばされそうになるの。私なんか、風船を追いかけるのやら、何追いかけてよいのかわからなくなっちゃって、オロオロしているんですけど。それを皆さん上の方からジーっと眺めているの。別に大人を喜ばせようとしているんじゃない。自然の姿なんだけれども、それが大人の緊張を解かしているようですね。

それを見ていると、子どもたちってすごいなあ、と私思うんです。緊張を解きほぐすって大変なことですよね。それが、存在するだけで簡単に解いてしまうんですから。

――すばらしい地域交流をなさっているわけですね。

赤羽：でも正式な交流は何もないのよ。それどころか、このビル群から受ける不都合なことも沢山あります。

全日空ホテルのすぐうしろでしょう。調理室の臭いがここにたまっちゃうんです。それに、前の道が全日空ホテルとオークラを結ぶ道路なんです。この教会ではしょっちゅう結婚式をして、披露宴はホテルでしょ。車はひっきりなしに通るし、その上、結婚式の時間と子供が帰る時間が同じになると大変ですよ。子供はお嫁さんを見たいけど、大人は自分のことで無我夢中だから、子供を

突き飛ばす。事故がないのが不思議なくらいですよ。

――でも、それでも、子供は大人の思惑なんか関係なく、勝手にビル街に適応してしまった、という感じですね。

赤羽：移転先が自然に恵まれたあまりにもすばらしい場所でしたでしょ。戻って来るときは本当に心配しておりましたのよ。でも心配していたのは私達だけで、それは本当に良かったと思っております。

運動会もこの狭いところでやりましたけれど、私達は最初はここでやろうなんて思ってもいなかったんです。でも、子供は「ここは広い」というのです。子供にとっては広いんです。

私はそれを聞いて、千利休さんのことを思いだしちゃって。千利休さんは、四畳半でお客さまをおもてなしなさるけど、夏は涼しく、冬は暖かく、お湯を冷ましたり熱くされたりして、工夫しておもてなしをなさる。

今は子供が千利休さんですわ。子供は当然この場所で運動会が開かれる、ここで出来るものと思っているんです。ここ以外の場所にバスをしたてて出かける、なんて思ってもいない。じゃあ、ここでしましょう、ということになりました。

でも全員で三十四人いますでしょ。その上にご両親、それ以上の数のお祖父さま、お祖母さまたちがいらっしゃる。その人数がどうやって遊ぶことができるか、その流れを考えるのが大変でした。

狭くても集中してできるものがあるんです。うなぎつかみとかビンゴゲームとか。それから、アークヒルズをつかってみたり、庭の傾斜を利用してボール投げをしてみたり、あらゆることを工夫するわけです。それで、この狭い庭を中心にして、まわりまで取り込んでしまった運動会になりました。最後は、みなさん汗だくでしたのよ。

来年はオークラもつかってやりましょう。その次は全日空ホテルも使いましょう。なんて話しています。

どんな場所にいても、子供っていうのはすごいパワーがあるもんですね。

――前のお屋敷跡とこの場所の違いを、子供たちはどう受けとめているんでしょう。

赤羽：私たちは、あのお屋敷とこの場所を区別していますけど、子供達には続いているんじゃないかと思うんです。お屋敷には木や草があった。ここは一本もないけど、かわりにジャングルジムがある、ぐらいに考えているんじゃないかなと思います。

この運動場は地下ですから、日は当たらないし、おまけに水はけが悪いんです。雨がふると二、三日カラッとしません。

でも、それでも子供達は変わらず駆けまわっているし、それに、ここにはいつもは使わない部屋があるんです。暗くしているんですが、そこに子供達は行くのが好きで、「悪魔の部屋」と呼んで、探険しに行ってはあちこちぶつけて帰ってきます。どんなものにも子供達は遊びを見出してしまうんです。

だから、私はそれを見て考えさせられました。与えられたものは歎くものじゃないな、って。理想のもの、っていうのは私達は頭に描きますよね。子供がいくら発想に富んでいるからといって、あまりに貧しいのもいやですが、与えられたところで私たちも満足しているのが、良い時間の流れなんだな、と思いますね。